

# 英国高等教育におけるクリエイティブ・ライティングの導入

—— 70年代イースト・アングリア大学を例に ——

高橋 まりな

(名古屋大学／高大接続研究センター)

## 1. はじめに

本稿の目的は、英国の大学に最初の文芸創作学科が設置された際の議論を整理し紹介するとともに、教育機関としての大学が文化創造に与える影響を文芸創作の観点から検討することである。事例として取り上げるイースト・アングリア大学 (University of East Anglia 以下 UEA) は1970年に英国の大学として初めてクリエイティブ・ライティング (Creative Writing 以下 CW) 学科を設置し、以降多くの作家・作品の誕生の場として機能してきた<sup>1</sup>。近年では2012年に大学の置かれた町ノリッジがユネスコの創造都市ネットワーク (文学部門) に認定され、2017年には卒業生のカズオ・イシグロがノーベル文学賞を受賞している。このように現在は一定に成功した学科として認知されているが、学科創設当初は反発の声も強かった。本稿ではCWを学科として制度化するにあたって何が懸念され、結果としてどのように受け入れられたのか記述することを通して、教育機関としての大学が芸術振興の文脈で果たしうる役割を検討する。

## 2. 高等教育における学科としてのクリエイティブ・ライティング

日本の教育研究におけるCWは、初等中等学校における作文教育を指す場合が多い<sup>2</sup>が、本稿が対象とするのは大学における創作学科・ディシプリンとしてのCWである。この領域は、イギリスではEnglishの下位に、英文学 (Literature)・英語学 (Language) と並べて位置づけられる。

イギリスでは1970年代に、新設大学およびポリテクニクを中心とする高等教育機関において、CW学科の設置が始まった。作文 (Composition) や創作 (CW) などの名を冠する講座を用意し、公用語である英語でのライティングを教えることは、アメリカの大学ではカリキュラムの一部となって久しかった<sup>3</sup>が、イギリスの大学においては70年のCW導入まで行われていなかった (Barry 2003, p.184)。したがって、CW学科はアメリカの大学からイギリスの大学へ移植された領域とみなされることが多く、導入が検討されていた60年代には、その点に抵抗を感じたイギリスの大学人が少なくなかった (Bradbury 1995; O'Rourke 2005)。加えて、現役の文筆家を教員として雇用すること、論文ではなく文学作品の創作によって学位が取得できること、ワークショップベースの教育を行うこと、といったCW学科の特徴は、当時あまりに革新的であり、批判の対

象になった。

英文学科に教員として27年間勤めた経験をもつ小説家のロッジは、2018年に出版した回顧録でCWについて「今や学部および／または大学院のレベルでこの科目を提供していない大学はごく少なく、作品を出版している若手作家で履歴書にこうした資格の無い者もごく少ない。CWが学術的な科目として成長し、プロの小説家・詩人・劇作家になるための普通の準備方法として受け入れられるようになったことは、現代文化におけるもっとも印象的な展開のひとつだ」と述べている (Lodge 2018, p.21)。

### 3. イースト・アングリア大学設立の背景

#### (1) 60年代新大学としてのUEA

UEAは1963年にイングランド東部ノーフォーク州の州都ノリッジに設立された。イギリス国内の大学で初めて現役の文筆家を教員としCW学科を設置したため、CWの歴史研究ではパイオニアとして言及される (Wandor 2008, p.8)。「最初の」導入校になるか否かは偶然に左右された可能性があるが、UEA設立の背景からは、CWという新学科の導入にあたり阻害要因が少なかったこと、また促進要因のあったことが読み取れる。

UEAおよび60年代に次々に新設されたサセックス (1961年設立)、ヨーク (63年)、エセックス (64年)、ランカスター (64年)、ケント (65年)、ウォーリック (65年)、スターリング (67年)、コールレイン・アルスター (68年) の7大学は、当時「新大学 (New Universities)」と総称<sup>4</sup>された。60年代新大学の設立期は、イギリスの大学大衆化を後押しした1963年の「ロビンズ報告」と同時期<sup>5</sup>で、それまで大学に入学していなかった層の学生に対して高等教育の機会を与えることが国家プロジェクトとして推進されていた。

社会史学者のパーキンによると、60年代に新設された (カレッジなどからの昇格を除く) 大学には2つの特徴があった。ひとつは運営のみならず設備・施設までも含むすべてが国家財政によってまかなわれるということ。もうひとつは設立当初から独自に学位授与権をもち、カリキュラム、評価方法、大学の組織と構造を自ら計画・管理できたことである。パーキンは、これらの条件によって、新設大学が「大学教育のあらゆる側面で実験を試みる自由と能力」(パーキン 1970, p.4) を最初から手にしていたとする。

国家が財源になることをパーキンが強調するのは、私的な財源 (個人の篤志家や宗派的・非宗派的諸団体による寄付) で運営される従来の大学との差異を強調するためであろう。実際には国費ですべてをまかなったわけではなく、大学の設置・運営には地方政府の協力と一般企業・個人による寄付が不可欠だった。そもそも大学を誘致する、すなわち大学に対する政府資金支出の責任を有するUGC (University Grants Commission) から設置場所として指名されるには、大学建設にふさわしい土地と、一定の財力を備えている必要があった。

UEAの初代副学長、のちに学長になったシスルスウェイトによると、UEAの場合、所在地であるノリッジが誘致に成功した理由は、市営ゴルフ場の提供により景観のすぐれた敷地が確保されたことと、地方税からの継続的な出資が決定したことであった (シスルスウェイト1970,

pp.65-66)。さらに、彼が「イースト・アングリアの地域社会に地方大学の観念を熱狂的に呼び起こすすばらしいデモンストレーションとなった」(同上, p.67)と評価している「大学募金部(Appel Committee)」が、UGCによる大学設置許可後に組織され、地元の人々から多額の寄付を集めることに成功<sup>6</sup>した。

大学の役割や教育・研究内容が財源によってすべて規定されると考えるのは短絡的だが、以上のような設立の経緯がUEAを一定に性格づけていたことは無視できない。特定の外部組織と結びつかない資金を得たことは、カリキュラム作成の自由度が高いことと同時に、自ら他大学との差異化を図らなければならないことを意味する。特色ある大学づくりは権利であると同時に、ある種の義務にもなったのである。また、高等教育の機会拡大を目的に設置されたことにより、新しく大学に入学するようになる、未知の学生たちに合わせるための教育上の工夫が設立段階から要求されていた。

60年代新大学はいずれも、枠の柔軟な・学際的な学科編成に力を入れた。学生が専門に分かれるタイミングを遅らせ、知識の断片化を防ぐためにとられた方策である。これは言い換えれば、家庭やそれまでの初等中等教育でいわゆる一般教養を獲得できなかった学生たちに、教養を与える試みであった。シスルスウェイトは、UEAがスクール制を選んだ理由について、以下のように述べている。「学生の立場からしても、単一学問のオーナー・コースは必ずしも学生の要求にもっとも適したものとはいえないように思える。伝統的なオーナー・コースは、学生が一般教養の教育をうけてから大学に入り、そして多くの場合には、教養のある学問ずきの家庭の子どもが大学にくるのが当然だと考えられていた時代にできたものである。(中略)学部の学生にはたんに学生が選択した専門を教えるばかりでなく、関連諸学科の基本的な性格と考え方を理解させ、学生の知識と理解力の範囲が教養ある人間として立つために十分な広さをもったものであることを保証する義務がある」(シスルスウェイト1970, p.70)。ここでいう「教養」に、たとえば伝統的な古典文献学のようなものは含まれない。60年代新大学は、伝統的学問領域を切り捨てることにも臆せず取り組んだ。伝統的学問ではオックスブリッジのような大学に太刀打ちできるはずがなく、また学生たちの能力的な限界、あるいは彼ら自身が希望しないという理由によって不要とみなされたのである。UEAの場合も、「少数の学生を引きつける『高価な』学科、たとえば古典、東洋語学、考古学などは大胆に切り捨てねばならなかった」(シスルスウェイト1970, p.74)。

教養に対するこうした姿勢、すなわち伝統にとらわれない新しい教養のリストをつくり、広く浅く学ばせようと試みていた点には注意が必要である。確かに60年代新大学は「専門職階級の需要に対応する」(ベン・デヴィッド1982)ために設立された側面をもつが、実務家養成を大学が担うこと、職業資格と学位を結びつけることを目標にはせず、専門職を目指す人々に教養教育を提供することを目指した。そのため現在文筆家にとって一般的なキャリアとなったCW専攻も、導入当初から専門職と結びついた学位として計画されたとは考えにくい。一般教養として開始されたはずのものが結果的に専門職と強く結びついたCWのケースに整合性のとれた説明を与えるには、続く(2)のように当時の大学で「英文学」の身分が大きく転換していたことを踏まえた上で、UEAに固有の状況を検討しなければならない。

## (2) UEAのカリキュラムと文学

元来イギリスの大学にとって「文学」はギリシャ・ラテンの古典であり、いわゆる「国文学」を科目とする習慣は無かった。イギリスの大学に初めて「英文学」教授が誕生したのは1904年、オックスフォード大学でのことである。就任したローリーは、イギリスで教授職を得る前にはインドで英文学教授を務めていた。インド以外にも、スコットランドやカナダには、19世紀にすでに英文学という学科と教授職とが存在しており、イギリスの言語と文化とをセットで伝えることができる英文学は、「宗主国本国の文化がいかにすばらしいかを、植民地の人間に教える」(大橋 1995, p.65) ために用いられていた。

イギリス国内での英文学教育は、大学教育に導入されるより前に民衆の教育の中で発展していた。マルクス主義文芸批評家のイーグルトンが、『英文学』が、アカデミックな科目として最初に制度化されたのは大学においてではなく、職人専門学校、労働者専門大学、巡回公開講座においてであったという事実は、重要な意味を帯びていたことがわかる。英文学は、文字どおり貧乏人の古典となった」(イーグルトン 1997, pp.43-44) と揶揄しているように、英文学は非エリートのための読み書き教材ないし教養として制度化されたのである。

以上の文脈を踏まえると、大学大衆化を支える60年代新大学で、教養としての文学が古典ではなく英文学となるのは必然的な流れであった。UEAの場合英文学は、英米研究(English and American Studies)というスクール<sup>7</sup>内での中心科目になった。従来の学科を複数またいで編成されるスクールは、教授陣を束ねるディーンの方針によって、学問・知識の統合を方向づけられる。最初に英米研究スクールを組織したディーンであるワットが歴史学・社会学的アプローチで文学研究を行う人物であったため、スクール全体としては文学と歴史学を結合させ、それによって「幅広い興味関心をもつ幅広く訓練された学生」を育てることが大まかな方針となった(Sanderson 2002, p.89)。サンダーソンは、当時の教授陣の研究関心が学科の方針にふさわしい多様性をもっていただけと書くが、その直後に挙げられる具体的な研究テーマは、D. H. ロレンス(1885-1930)、ジョージ・ギッシング(1857-1903)、言語学、18世紀の小説、文学理論となっており、比較的新しい文学と大学で研究が始まって日の浅い流行の研究領域にテーマが集中していたことがわかる(同上, p.89)。

CW学科が正規の学科として設置されたのは、UEA開学後8年が過ぎた1971年になってからのことだ。英米研究のスクールが組織された段階では創作を系統立てて教える計画は公式には存在せず、後に看板学科となるCWも特色ある大学づくりの一環として初めから計画されたとはいえない。ただし後述の通り、他の大学で文芸創作を教えた経験を持つ現役小説家を教員として雇用した時点で、その後の展開を全く予想していなかったとは考えにくく、このことはUEAに大学院生として在籍しながら学科の起源を研究したホリーウェルも言及している(Holeywell 2009)。

ここで英国外の状況に目を向けると、米国の大学には1930年代から文芸創作のアカデミック・プログラムが存在し、UEAに導入された1971年には既にCWが拡大を遂げ一般化していた。そのため、当時英国内の大学に存在しない学科ではあったが、英語文学を専門とする大学人にとってCWは、仮に許容できないとしても未知のものではなかった。後述のようにUEAのCW学科は導入直後から幸運な展開に恵まれたため、その運を強調する記述が目立つ。しかし実際には、

完全に新しい試みというには確固とした原型があり、偶然うまくいったというには長い試行錯誤の歴史のあるプログラムであったといえよう。

英国での導入と同時期の米国の状況の記録として、1973年1月に国会図書館で開かれたカンファレンスの議事録がある。カンファレンスはCWを教える教員たちのために開かれたもので、国中で増加するアカデミックなライティング・プログラムのそれまでの成果と弊害とを評価することを目指した。ここで注目したいのは、知的であっても読み書き能力が充分でない学生には論文形式で書かせるよりクリエイティブに書かせた方が良いものが書ける、という参加者の発言である。UEAのケースに即座に当てはめることはできないが、新しい教養という観点から検討するとき、文学へのアプローチとしてのCWは、批評を基礎とするそれまでの文学研究と比べ、より非エリート的な選択肢であると見なしうることに留意したい。

#### 4. クリエイティブ・ライティング学科導入とその後の展開

##### (1) 教員と彼らの問題意識

伝統的な大学の英文学科の仕事は、作品の読み方を教えることであって、書き方を教えることではなかった。そして、大学の研究者は読み解くことの専門家であり、作品に価値を付与することで国民文学を編むことを仕事にしている、実際に作品を書くわけではなかった。UEAの革新的だった点のひとつは、英国で初めて、現役の作家を教員として雇用したことである。1963年に英米研究スクールのディーンの依頼によりUEAで教職に就くことになったウィルソン(1913年生1991年没)と、68年に加わったブラッドベリ(1932年生2000年没)はともに小説家であり批評家であった。また、彼らはいずれも米国の大学でCWを教えた経験を持っていた。

米国での教授経験という点で2人のキャリアには共通点があるが、アカデミックなキャリア全体を見ると、対照的な点も多い。ウィルソンはスコットランドの資産家を親にもち、パブリックスクールを卒業した後にオックスフォード大学で中世史を専攻、大英博物館図書館に職を得た。第二次大戦中は一時的に外務省に徴用され、戦後に図書館に戻り、小説を書き始める。この経歴は、UEAの英米研究が目指していた「幅広さ」「文学と歴史学の結合」という方針を考えると、教員として魅力的だったと考えられる。一方ブラッドベリは鉄道員の家庭に生まれ、当時の新大学だったラスター大学で最初の学位を取得、ロンドン大学クイーン・メアリー・カレッジを経て、マンチェスター大学でPhD、1950年からしばらくアメリカの大学で過ごした後、1959年からハル大学で成人向けの文学の講義を始めた。61-65年には、カルチュラル・スタディーズの中心地となったバーミンガム大学で、近代英文学の教授を務めている。

CW学科の誕生についてはブラッドベリの活躍が強調されることが多く、二人の教員の熱意と貢献の度合いには差があった可能性が高い。ホリーウェルによると、ウィルソンはCWを教えたいという希望をもってUEAに来たわけではなく、就任直後のガーディアン紙のインタビューにも、CWを教える予定はない、CWについて何か問題を抱えている学生がいるならば個人的に話し合うことができる、という消極的なコメントをしている(Holeywell 2009, p.19)。

1960年代後半には、ウィルソンとブラッドベリは、執筆活動と講義の傍ら、学部生の創作活

動の支援に取り組むようになった。「1960年代初頭の大きな教育の夢のなかで設立された新大学は、活動的かつ創造的な学部生から成る新しい世代を引きつけた。彼らは文学への新しく『現代的な』アプローチを探し求めていた。彼らのなかの多くが、自ら創作することに取り組んでいた」(Bradbury 1995, p.viii)。初期の活動は、ウィルソンとブラッドベリ、その他の実務家教員、教員たちが個人的に知り合った作家たち、そしてUEAの学生たちによる非公式なワークショップという形をとった。大学の正規の講義時間内に行われた活動についても、大学史にわずかな記述がある。「ジョナサン・パウエルとスヌー・ウィルソンがその授業名のもとで劇作に取り組めるようにするべく、『アメリカ文学個人指導 (tutorials)』というミステリアスなコースがつくられた」(Sanderson 2002, p.89)。教授たちに才能を見込まれた学生たちは、正規の課程としてライティングを学べるようカリキュラムを都合してもらえたということだろう。ウィルソンとブラッドベリは最初、このような学部生の学科を公式なものとして整備しようとしたが、先に修士課程としてより専門化した学科をつくろうと考えを変えた(同上)。

学生たちの要望に応えるための活動は、学科導入の動きを後押しした可能性があるが、ブラッドベリには別の動機もあった。回想のなかで、ブラッドベリとウィルソンはともに「英国の本格的なフィクションと短編とに対してますます失望をつのらせていた」(Bradbury 1995, p.vii)と書かれている。誰もが「小説の死」を口にし、文芸誌が廃刊に追い込まれ、出版社も編集者も批評家も文学に将来があるか疑い始めていた、というのがブラッドベリの見解である。

同様の記述は「戦後の英国小説 (The Postwar English Novel)」と題した彼の批評にも見られ、こちらでは更にもうひとつ、別の見解が示されている。戦後の批評は奇妙な不安を抱えている、と彼は主張する。「われわれの時代の小説は、今世紀の前半のうちに、モダニズムの手法によって既にかかれてしまったのではないか、という仮定が浮上している」(Bradbury 1973, p.167)。こうした論調のなかで有力なテーマはふたつあるとし、ひとつめは先に挙げた回想と同じ「小説は死んだ」という説、そして加えて彼が指摘したもうひとつが、小説は死んだのではなく米国に向けて飛び去ったのだ、という説であった。この論考では、ブラッドベリはCW学科について明確に述べてはいない。米国では実験的な小説が次々に書かれ、熱狂的に受け入れられていると書いているだけである。ブラッドベリが大学でCW教育を行うことが文学の衰退への対抗策になると考えていたかどうかは不明だが、米国の大学で創作を教えた経験から、大学CWの隆盛と文学の熱狂とを結びつけていた可能性は考慮すべきであろう。

更にブラッドベリは、当時のアカデミックな文学研究のもっている、書くことと読み解くこととの乖離を問題にしている。

ひとつの奇妙な事実がわれわれに襲いかかった。だれもが小説の死を宣告しているのに、文学批評の死を告げるものはいないのだ。じつは(われわれ自身の大学における風潮からも明らかであったように)、フランスの新しい考えに刺激されていた批評は、生き生きと再生のみちをたどっており、新しい姿をした文学理論のなかに現われてきていた。パリではロラン・バルトが「作者の死」についてのエッセーを出版していた。(中略) アンガスと私は文学の教師であると同時に、ふたりとも小説家だったため、また自分たちの専門を真剣に受け止め

ていたため、教室で作者の死を宣言しながらそのひとりとして死んでいくことは、どこか妙だと感じられた。さらに過酷だったのは、批評の実践とライティングの実践とが遠く分離してしまったことだった。かつては作家と批評家とが多分に同じ人々であったのに、いまやライティングの実践とその研究の理論とはすっかり分かれてしまっているように思われた。(Bradbury1995, pp.vii-viii)

ハーバード大学がナボコフに文学教員の席を用意したとき、ヤコブソンが「次は何だ？ゾウに動物学を教えてくれるよう依頼するのか？」と揶揄したというエピソードは、CWに対するアカデミックな文学研究者の反発としてしばしば取り上げられる。英国の大学も、文筆家を教育研究の主体として取り込む準備がまだできていなかった。こうした状況下でブラッドベリが当事者として臨んだ改革は、単に大学における作者を研究対象から教育主体に引き上げることや、大学を作家養成所にするを指すものではなく、書くことと批評することの融合として構想された。彼の構想はこの後もUEAのCW学科の理念として残り、1990年に博士号の授与が始まる時、その学位をCreative and Critical Writing PhDと呼ぶことにつながった。

1967年、ブラッドベリとウィルソンはUEAに対し、のちにCreative Writing MAとして制度化されることになる、小説執筆を専門とする大学院の学科設置を提案した。しかし彼らは想定外の反発にあう。

われわれ二人が共に、全く認識していなかったことがあった。それは、CWの提供に対する、英国における疑いの程度である。それは一般的には、電気掃除機とかフラフープのような、危険なアメリカの発明品として見られており、間違いなく、英国大学の文学部に居場所を見つけている例は皆無だった。かなりの数の同僚たちが、このアイディアに疑問を抱いた。書くことは教えられないと考えた人がいた。人によっては、もし可能だとしても、するべきでないと考えた。そして、たとえ正しく教えることができ、厳格に試験ができたとしても、それは依然として、実践ではなく客観的な文学研究にすべてを捧げる場所である大学におかれることはないと考えた人も。(Bradbury 1995, pp.viii-ix)

ここで示された疑念は、今もなおCWに向けられる、領域としてのCWの抱える未解決問題ばかりである。ブラッドベリはこのとき、例外的に幸運な展開なくしては、学科の設立は不可能だと考え始めたという。実際には、期待通りの幸運により<sup>8</sup>、UEAのCW学科は上述の問題を全く解決しないまま、いわば実力行使で設置されることになる。

## (2) CW学科導入と最初の学生

ウィルソンとブラッドベリは、彼らの計画したCW学科が機能するのか、実際に学生をとって試す機会を得た。ブラッドベリの回想によると、その試行期間中のCW学科では、学生は学位取得のために通常の英米研究専攻の学生と同じ要件を満たす必要があり、学位請求論文だけが例外で、代わりに小説を提出することができた。この試行期間の唯一の学生で、在学中に作家として

デビューしたマキューアンは、手記のなかで、当時の募集要項の記載について以下のように書いている。その修士課程の研究課題は、「文学理論による戦後英米文学研究、19世紀ヨーロッパの比較文学研究であり、オプションとして、コースの終わりに、アカデミックな学位請求小論文に代わって25000語の小説を提出することができる」(McEwan 1995, p.xvi)。

マキューアンは別の60年代新大学であるサセックス大学を卒業したあと、多数の大学の募集要項を取り寄せ、それらを比較しながら進学先を決めようとしていた。中でもUEAのCW学科は、マキューアンの目に魅力的に映った。「ノリッジという場所はどこにもましてすばらしく、米国の小説は性に合っている。また、大学のパンフレットには場違いな、小説の提出という異例の提案のこともあった。私はマルカム・ブラッドベリとアンガス・ウィルソンの作品のことを知っており、気に入っていてもいた。目立たないほんの1パラグラフの文章のなかに、私の不満と希望が描き出されていた」(同上)。マキューアンが大学に問い合わせると、ブラッドベリが電話口で、CW学科はその年が初年度であり、ひとりも志願者がいないため打ち切りになりそうなことを告げた。

CWの試行期間は、教員2名・学生1名という小規模編成で1970年にスタートした。ブラッドベリとウィルソンは、パブや軽食堂でマキューアンと会い、作品についての議論を繰り返した。マキューアンは大学院生として他のアカデミックな課題をこなしながら、コースにいる12カ月の間に20以上の短編を書き、次々に英米の雑誌に投稿した。ブラッドベリは「その年が終わるまでに状況はすっかり変わった。疑いを抱いていた人たちは納得したのだ。クリエイティブ・ライティングの修士課程が、ここに事実上誕生した。」(Bradbury 1995, p.ix)と書いている。在学中の短編を集めた『最初の恋、最後の儀式 (First Love, Last Rites)』はサマセット・モーム賞という大きな新人賞を受賞した。マキューアンの成功という実績によって、学内の反対者の声を抑え、UEAのCW学科は本格的に開始されることになった。

### (3) 正式導入後のカリキュラム

ブラッドベリは、「時を経るにつれ、初期の卒業生の成功が志願者数にかなりの影響を与え(1989年にカズオ・イシグロがブッカー賞を受賞したときに熱狂的ピークに達した)、私たちのところに新しいすぐれた学生たちがもたらされた」(Bradbury1995, p.x)と書いている。テレグラフ紙もWeb上の追悼記事で「イシグロがブッカー賞を受賞すると、イースト・アングリアは、文筆業で成功することへの近道が与えられると決め込んだ出願者であふれた。実際にはブラッドベリが指摘したように、彼が教えた200人の学生のうち、出版に至ったのは60人にすぎないのだが」<sup>9</sup>と指摘している。

84-85年に学生としてCW学科に在籍し、現在は小説家・UEA教員のクワンが、初期のCW学科で何が行われていたのかを報告している。課程は全部で4期に分割されており、最初の2期の間、学生は週に一度のCWのワークショップと、週に一度のアカデミックなセミナーに参加する。ワークショップでは、現役作家の教員が1人つき、円をつくって座り、クラスメートの作品を互いに論評する。セミナーでは、「文学理論」「ポストモダン小説」といったテーマで教員が講義し、学生にはある程度の分量のアカデミックな批評が課される。セミナーのもうひとつの役割



は、CW学科の学生たちが、アカデミック専攻の学生たちとともに学ぶ機会をつくることである。後半の2期は、毎週教員と一対一の個人指導を受ける。コースの終わりには3時間のアカデミックの試験を受け、夏期休暇に入ってから15000語の小説を書いて提出する (Cowan 2011)。

導入初期の教育においてCWと「アカデミックな科目」とは、別枠で捉えられており、創作と並行して従来のアカデミックな英文学のトレーニングを行うことで学位要件を満たすという形式をとった。ワンダーは、UEAのプロジェクトが「現代文学のキャンオン創造に文化的に介入するという、美学的-職業的な目的において、『天才』ではないにしても『才能のある』人々が、プロの文筆家になるように訓練している」(Wandor 2008, p.18)と評価している。実務家による専門職業人育成に無理にアカデミックな装いを与えるのではなく、職業につながる実習とアカデミックな批評の両方を行う。その複合的カリキュラムの提供場所として大学が選ばれた、というのがUEAのケースだといえる。

#### (4) 国家主体の芸術支援とCW

CWの修士課程の整備、一部の学部生に対する非公式な指導と並行して、UEAは文筆家のレジデンス事業にも取り組んできた。アーティスト・イン・レジデンス事業とは、公共性の高い場所にアーティストを集め、彼らに経済支援を行うことで創造活動のための時間を提供する文化振興事業である。文化政策学者の後藤は、レジデンス事業の目的をふたつにわけて説明している。ひとつめの目的は、アーティストに対して一定期間奨学金を出し、創造活動に専念する時間を与えることである。そしてふたつめは、作品の制作過程を公開することによって、現代アートを社会にひらくことである。このふたつめのはたらきに注目して、レジデンス事業はまちの活性化を目的に行われる場合もある (後藤 2001, pp.117-118)。

UEAの場合、CW学科が試行期間にあった1970年には既に地元の組織から資金提供を受け、ヘンフィールド・フェローシップという6ヶ月間のレジデンス事業が行われていた (Wandor 2008, p.9)。また学科が正式に設置された後は、アーツ・カウンシルから奨学金を受け、大学の課程で学ぶこともできるようになった。このようにUEAは、授業料と引き換えに教育を提供するだけでなく、地域や国の資金を文筆家志望者や実務家に配分する役割を担ってきた。また、教員として実務家を雇用する仕組みも、経済的・社会的に安定したポジションを作家に与え、創作にうちこめるようにしていると考えるなら、一種のレジデンス事業といえる<sup>10</sup>。

## 5. おわりに

60年代新大学としてのUEAの特徴、大衆化時代の大学として非伝統的な学問領域を含む自由な学科編成が可能であったことは、新たな学科の導入を容易にした。また、当時カルチュラル・スタディーズの隆盛を背景に新しい教養として近現代英文学が重視されたこと、文学作品と名指される対象が必ずしも伝統に縛られなくなったことは、大学が新たな文学作品の誕生の場となる基礎をつくった。UEAが先駆者として有名になった背景には、担当教員の個人的な情熱や入学者の商業的成功など偶然に左右される要素もあったが、非エリート的教養教育を使命としながら

実務家教員による特色ある大学づくりをしようとしていたUEAにとって、合理的選択の結果であったといえる。

文筆家志望者にとって大学でのCW専攻が一般的になったこと、また大学にとってCW学科の設置が一般的になったことは、大学大衆化によって社会全体が高学歴化したことのひとつの表れと見なすこともできる。しかし、資格化による質保証が不可欠とはいえない芸術領域において大学での学位取得が一般化したことには、それ以外の理由もあったと考えるのが妥当であろう。本稿ではアカデミックな批評と文芸作品執筆の統合という実務家ブラッドベリのシナリオを提示すると同時に、公的セクターによる芸術支援に言及することで、大学が文筆家にとって拠点となることの意義を示した。

CW導入によって大学が文芸創作にもたらしたものは、雇用機会と奨学金だけではない。特定のトピックに対し専門的関心を持つ人々を集合させる大学の機能は、孤獨な仕事になりがちな文筆家に同業者のコミュニティを提供している。ワークショップを中心とするカリキュラムは、師の技術・知識を伝達するだけでなく、他者からのフィードバックを受けて内省する機会を参加者たちにもたらした。また、教員や卒業生の人脈は、他の学科でそうであるのと同様に、学生と就職先とを直接結びつけている。

こうしてある意味で必然的にCWが大学で制度化されたことによって、それまでアカデミックな認証を必要としていなかった文筆業という職業領域に学位という資格がもたらされたことは両義的である。要件を満たせば誰でも職業に近づけるという意味では民主的だが、資格を取得しない人々を職業から遠ざける可能性もあるためだ。UEAの事例で導入時に問題になった「書くことは教えられるか・教えるべきなのか」という問いは、単なる日々の教育実践上の倫理的問題やプログラムの実施可能性の問題ではなく、大学が芸術家に対する認証者になること自体の適切さや認証条件としての教育内容の妥当さの問題として今も残っている。

現在ノリッジにはNational Center of Writingが置かれ、創造都市として国家の文化事業の拠点となっている。文学研究・教育の拠点となることは大学設立時に明確に計画されたものではなかったが、結果的に出資した地域社会に対する貢献になっているといえる。地域への文化的な貢献のモデルとしても、検討の余地があるといえるだろう。

本稿は学術的・文化的なインパクトの検討にとどめたが、クリエイティブ産業先進国である英国において大学が文化創造に積極的に関与している例としても、本事例には参考になる点が多い。初期の学生として言及したマキューアンの『贖罪』やイシグロ『日の名残り』の他、日本でもよく知られるシュヴァリエ『真珠の耳飾りの少女』、ボイン『縞模様のパジャマの少年』など、UEA出身者の作品は出版物としてだけでなく映画作品としても商業的な成功を収め、国外に英国文化を広める役割を担ってきた。文化とその担い手の誕生・相互作用の場としての大学に注目することで、既にあるコンテンツをどう売るかにとどまらない文化輸出の議論が可能になるだろう。

---

1 コースのWebサイトにある卒業生のページで人名・学位種別と取得時期・作品名の膨大なリストを見ることができる。<http://www.uea.ac.uk/literature/creative-writing/alumni>

- 2 マイヤーズによると、CWという語を教育の文脈で使用し始めたのは1920年代アメリカの中学校である。この「創造的作文」は、教え込み中心の伝統的な英語英文学（English）教育に対する進歩主義・児童中心主義の立場からの異議申し立てとして始まった（Myers 1996: 101）。
- 3 アメリカでは創作作品による学位（修士）取得例が1931年に既にあり、1946-48年の戦後期に立て続けにプログラム導入やコース設置が行われた（Myers 1996）。
- 4 現在「新大学」の呼称は、92年の継続・高等教育法によって大学に昇格したポリテクニク及びカレッジを指すことが多い。
- 5 ただしこれら7大学はすべて「ロビンズ報告」の委員会が組織される61年より前に認可されていたため、時代背景は共有しているが、ロビンズ報告によって設置されたわけではない。
- 6 大学史では、募金部がトップ企業の重役だけでなく地元の農業従事者に熱心に働きかけたことが強調されている（Sanderson 2002, pp.47-48）。寄付の内訳は同書p.50にリスト掲載。
- 7 スクール制では、学部や学科（faculty, department）の代わりに、より広い関連学問をグループ化したもの（スクール）を部局としてもつ。学生はスクールに所属し、将来専門に選ぶことになる学科以外にも周辺の学科について教えられる。
- 8 ブラッドベリの言葉をそのまま受け入れ、コース設立を単なる幸運の物語と捉える従来の見方には批判もある。（Jaillant 2016）
- 9 The Telegraph, 2000.11.28, “(obituary) Sir Malcolm Bradbury” (<http://www.telegraph.co.uk/news/obituaries/1375890/Sir-Malcolm-Bradbury.html>)
- 10 ホリーウェルは、UEAによるウィルソンの雇用が、あらかじめレジデンス事業としての機能を期待して行われたものだったと主張している（Holeywell 2009）。

#### 【引用・参考文献】

- イーグルトン、T. (1997) 『新版 文学とは何か』（大橋洋一）岩波書店。
- 大橋洋一（1995）『新文学入門』岩波書店。
- 後藤和子（2001）『文化政策学 法・経済・マネジメント』有斐閣。
- シスルスウェイト、F. F. (1970) 「イースト・アングリア大学（イギリス）」『ニュー・ユニバーシティ』（原芳男・新井郁男・天野郁夫・岩内亮一）、東京大学出版会、pp.64-83。
- パーキン、H. G. (1970) 『イギリスの新大学』（新堀通也）東京大学出版会。
- ベン・デビッド、J. (1982) 『学問の府』（天城勲）サイマル出版会。
- Barry, P. (2003) *English in practice: In pursuit of English studies*, Arnold.
- Bradbury, M. (1971) *The Social Context of Modern English Literature*, Basil Blackwell.
- (1973) *Possibilities: Essays on the State of the Novel*, Oxford UP.
- (1995) “Introduction” Bradbury, *Class work*, Hodder and Stroughton , pp.vii-xiv.
- Cowan, A. (2011) “Blind Spots: What Creative Writing doesn’t know” in TEXT, 15 (1) <http://www.textjournal.com.au/april11/cowan.htm>
- Dawson, P. (2005) *Creative Writing and the New Humanities*, Routledge.
- Gertrude Clarke Whittall Poetry and Literature Fund (1974) *Teaching Creative Writing*, Library of Congress.
- Holeywell, K. (2009) “The Origins of a Creative Writing Programme at the University of East Anglia,

1963-1966” *New Writing*, 6 (1), pp. 15-24.

Jaillant, L., (2016) “Myth maker: Malcolm Bradbury and the creation of Creative Writing at UEA.”  
*New Writing*, 13 (3), pp. 350-367.

Lodge, D. (2018) *Writer’s Luck: a Memoir: 1976-1991*, Vintage.

McEwan, I. (1995) “Introduction” *Class work*, ed. Bradbury, London: Hodder and Stroughton, 1995, pp.  
xv-xix.

Morley, D. (2007) *The Cambridge Introduction to Creative Writing*, Cambridge UP.

Myers, D. G. (1996) *The Elephants Teach: Creative Writing Since 1880*, Chicago UP.

O’Rourke, R. (2005) *Creative Writing: Education, Culture and Community*, Niace.

Sanderson, M. (2002) *The History of the University of East Anglia Norwich*, Hambledon and London.

Wandor, M. (2008) *The Author is not Dead, Merely Somewhere else: Creative Writing Reconceived*, Pal-  
grave Macmillan.

[Abstract]

## Creative Writing in UK Higher Education

— A Case Study of the University of East Anglia 1970's —

Takahashi Marina

The aim of this article is reconstructing the historical narrative of Creative Writing (CW) course at University of East Anglia (UEA). UEA at Norwich was one of new universities founded in Britain in the 1960s to response to the increasing need for higher education. Angus Wilson and Malcolm Bradbury were both professors of literature there, and in 1970 they found the first CW course for postgraduates in the UK. CW was established as an academic subject in the US from the early 20th century, so not a few UK academics assumed skeptical attitudes for this cultural intervention. They thought writing couldn't or shouldn't be taught.

Now CW course at UEA is famous for its graduates and Writers Centre Norwich leads the UNESCO City of Literature. This article examines how CW program was accepted as an academic subject or discipline and why this specific university was suitable for new educational program from historical view. Reconstructed narrative of beginning story provides several ways of looking at the characteristic of university as educational system.